初學文範

岡松甕谷著

一

柳田文庫
文庫11
A1260
1

紹成書院藏
文庫11
A1260
1
010190526742

明治九年十月廿四日板權免許

岡松甕谷先生著

初學文範

紹成書院藏

紹成書院之章

[illegible]年十月廿四日[illegible]

[illegible]

初學文範

紹成書院藏

序

林利吉

距今七八年西學大興海内靡然從之於是乎欲廢漢字専用國語倣西文體者有矣欲仍用漢字限其數以便乎習學者有矣爭創美説求與衆訟而識者黙然不置辯於其間蓋知其言

柳田泉文庫

無於不久而自熄也然是言一出後進之士不復用力於文辭以致世之以俗文譯西籍者率皆鹵莽滅裂無能舉其要於是初知漢文之不可以已稍々舍西籍而學焉繙之創美說者亦容購謝氏軌範沈氏讀本以為

帳秘欲一蹴而造於能文之域而初不知其不可襲取也夫學文必有次序初學先自記實以循序而進焉則可以庶幾也已昔者南豐帆足先生教弟子必先授以屬辭正譯法使其優游涵泳有得於心而應於手以左

右逢源無施而不可當時從游
先生柴村者多而吾友麑岡
松君其最也屬者下帷東都仍
先生遺訓誘掖學者而奧子紹
野中處平皆嘗事先生知君之
善於屬辭也彙其平生課諸生
譯釋史者名曰初學文範以公

于世刻成使余題一言余常謂
文猶棊學碁者必據先哲棊經
以審其運路而後下子始有法
學文亦然如斯書乃示其蹊徑
者也且夫字猶碁子也能者所
用其數不加多但置之得宜可
以無敵於天下矣顧斯編所用

不過數子字亦非奇僻難讀者然哉緝之至數十篇之多予變萬化莫不如意焉嗚呼何其巧也余願後生小子從此法而學學而熟焉庶乎一洗方今文辭之陋而譯書和文亦至于通達意明也夫

丙子冬日

海南宍道撰

藤野印

初學文範

題言五則

一頃者甕谷子撰一小冊。述作文之方。予更為彙其平生課諸生。譯稗史者數十篇。分為三卷。名曰初學文範。與小冊子並行。以便學者取則撰材焉。譬如學劍與其徒講法。不如觀之跳趯擊刺之間。有以獲於巳。冀足盡其道矣。

一學豈止于文乎哉。然不學文。望其徧通群籍難矣。予少與甕谷子同事文簡先生。當時從先生學者甚衆。先生令誦習史漢。旁取吾邦稗史寫以漢文。其有紕

繆。先生輙一筆勾之。令更作。如此者屢矣。必得乎正而後已。於是讀書與作文。互相進長。足爲成材之地。甕谷子教諸生。亦因先生遺訓。必先授以正譯法。但以後生少年。多不嫻於辭。每一篇成。甕谷子隨手改竄。後復屢經刪定。故每篇起草。雖出人人所爲。要不過甕谷子撰次。是以令不復著記者名姓。從簡也。

一學文莫善於記實。亦莫難於記實。學者苟有得於此。其作序記論說。未必至甚費力。甕谷子夙擅長於此技。方予事先生。每有難於措辭者。必從論定。所裨益甚多。迺如是編。非獨淘鍊字句。一洗和人口吻。其措辭必反覩乎原稿。譬之一匹錦。龍鳳花草之紋。表裏整然。初不爽絲毫。於是每篇寘原文於前。使讀者有考於記實正體焉。

一予已輯是編。更延野中處平同校。遂與連几諷誦。每遇會心處。急援筆題數語其上。或就行間批之圈之。夫嗜秦人之炙。無以異於嗜吾炙。況近獲之我同臭味。或有不免激賞浮實。亦情之所不能已也。

一近歲吾邦與唐朝鮮通好。琉球亦藩屬於我。自今而往。使命往來。與夫商旅之轉貨貿易。騷人韻士之觀風問俗者。其假言以宣意。非獨我有資於彼。彼亦將

有資於我。往觀西人取漢籍。行間註已辭。以便學漢音者。顧是書或傳播於異邦。異邦人將因漢文有以得於我辭。猶西人之為。果然。非獨惠賚於我後生小子而止。通東西之志。為邦國之好。亦未必無小補也。

明治九年七月　　奥並繼　識

早稲田大學圖書

據下文寺部下當有梅坪二字蓋誤脱也

初學文範卷之一

岡松甕谷　撰
奥並繼　編
野中準　并評

今河義元。尾張國大高の城に。鵜殿三郎長持を置きけり。織田信長も所々に城をかまへ。丹家にハ水野帶刀。善照寺にハ佐久間左京。中島にハ梶川。。鷲津にハ飯尾近江守宗定。又丸根にハ佐久間大學助盛重をおきて。其外寺部。舉母。廣瀬にも砦ありて大高に兵粮を入なハ鷲津丸根に貝を吹

べし。寺部舉母廣瀬の砦にて馳集り。丹家中島より後詰せよとぞ定られける。義元東照宮の御もとに使をもて大高に兵粮を運入させたまへとあり。東照宮心得候と仰てやがて打たちたまふを。酒井石川等信長の手あてきびしく候中々大高に兵粮入ん事思もよらじと申せども聞し召入られず。さきに謀有とて。先兵をうち福釜の松平左馬助親俊。酒井與四郎忠親。石川與七郎等四千計永禄二年四月九日の夜半に。大高鷲津丸根をまきになし。寺部の砦へおしよせよと下知

したまふ。東照宮は八百計の兵をひきゐ。兵粮米馬におほせ大高の城二十町そなたにとゞまりたまひうかゞひりて。先陣寺部におしよせ城中さゝへる處を。一の木戸口打破りて火をかけて。又梅坪におしよせ三の丸まで攻入火を放て燒たつる。其烟天をてらし閧の聲ひゞきわたりて聞えければ。丸根鷲津より是を見て。三河の敵きたるとぬみ越て攻入たるは。いかさま故有と覺ゆるぞとく後詰せよとて。寺部梅坪にさし向ふ。其間に東照宮麾をふらせたまひ。米おほせたる馬千二百疋打

済して事なく大高に運入させたまひけり。丸根鷲津に残る者どもも是を見れども。大かた後巻に出さきはせんかたなし。東照宮やがて軍兵をひきまとひ岡崎にかへらせたまふ。人々今夜の謀略及ぶべきに非ずと申しければ。聞し召され此甚たり易き手だてなり。先思もよらぬ寺部梅坪を攻て火をかけ。丸根鷲津の軍兵を後づめに出させ。ひきたがへて兵粮をはこび入させしなり。兵法に神速を貴といひ。又其不意に出よといへることありとのたまひければ。皆此殿臨濟寺の雪齋に兵書をよみ習ひのひしかども。かゝる謀はよも出し。天性さときて大将の道を得たまへることぞ申する。此十八の御歳の事なり。（常山紀談下並同。蓋原文用字或不能無差謬。今且仍舊不敢改定。後皆倣之。）

今川義元置砦於大高。使鵜殿長持守之。以逼織田右府。右府亦使水野帶刀守丹家。佐久間左京守善照寺。梶川守中島。飯尾宗定守鷲津。佐久間盛重守丸根。及寺部梅坪。舉母廣瀨。亦皆置戍焉。令駿河人納糧於大高。鷲津丸根吹螺為號。寺部梅坪舉母廣瀨出兵逆戰。丹家中島援之。已而義元使使謂東照公曰。請為我納

糧於大高。公許諾。酒井石川皆曰。尾人置砦繞大高拒守甚嚴。君安得納糧。公曰。吾有一計。卿等勿以為虞。夜分兵為二。使松平親俊酒井忠親等。將四千人。急過鷲津丸根。直襲寺部。奪門縱火。轉攻梅坪。又入其郛。火之。鷲津丸根兵望見驚曰。敵背我二壘。敢深入。得無非有他奇策乎。何不速援之。遂悉兵赴戰。公豫將輕兵八百。駄糧於馬者千有二百疋。距大高半里而止。乗間疾馳至大高。盡輸糧城中。鷲津丸根已空壁出。留守者見之。無能拒也。公已還。諸將皆曰。君之為謀。非臣等所能及也。公曰。此非難知也。我遣兵急攻寺部梅坪。以誘敵兵

出戰。因得以納糧耳。兵法不云乎。兵貴神速。又曰。出其不意。此吾所取法也。諸將皆悦服。私相謂曰。我公嘗從臨齊寺雪齋受兵書。顧安得有此策。公豈非生而具良將之略乎。公是舉蓋為永祿二年四月九日夜半事。時公年十八云。

東照宮。濱松におはしませし比。ある夜本多正信御前に有しに誰人にてかありけん。姓名をもらしは懐より書を取出し諌奉るべしと兼てより存る事の候て書候ものと申せば大によろこばせ給ひ。夫よめと仰有りければ披きてよみたるに。一條に

み終る度毎にうなづかせ給ひ。尤なりと仰せられよみ終りけれバ。汝が志感ずるに詞なし。これより後も心置なく告よ。返ゞくも神妙なりと。くり返し仰られけれバ。忝きよし申て退出ス。正信居残りて。只今諫め申せし事用ふべき事に候ハスと申スに。東照宮大にゝしきこえさせ給ひ。いやとよ己が過ハえしらずして過るもの也。國を領し人を治る身にハ。過を告知せ諫る者ハ鮮くて。唯諂ひて。主君のいふ事道にたがひても。さハ候ハドと詞を返ス人ハなきぞかし。諫をふせぎし人の國をうしなひ身を亡し。後世の笑ひ草となりしためし多し。只今それを諫し者。日頃心を盡し。見及ぶ様に付。諫んと思ひて書志るし。時もゆろが見せんと。思ひ居たりし志。何にたとへんやうなし。其用ふべきと。用ふべからぬとにはよらざる也。唯彼が忠臣を愛ずる也とぞ仰られける。或夜の御物語に。凡主君を諫る者の志。軍に先がけするよりも大に踰まされり。其故ハ。戦に臨みて。一番に進ミ出るハ。素より身をすてゝの事なれども。必しも討死せス。又討れたりとても。後の世に名

を殘し。死後のほまれとなるぞかし。幸に功名をとくきは恩賞にて家富子孫榮る也。されは得有て失なき忠なり。諫は然らず。主君不道にて善をにくむにすゝみ出て直言する者十に九つは刑罰にかゝり妻子をもほろぼし果る樣に成行ぞかし。失ありて得なき忠なり。武功は名利の為にもなるべし。諫言は聊も身の為をかまふ心あらば。いかで主君の前にて直言をすべき。唯人に君たるものゝ賞すべきは諫臣なりとぞ仰ありける。

東照公在濱松。本多正信夜侍燕語。有一人入見。取書

如見東照公悃々懇諭之狀

於懷。以進曰。小臣久欲有所報聞。謹載之書。幸得賜觀覽。公悅。令即席讀之。每終一條。莫不首肯稱善。已畢。公曰。寡人深嘉卿忠義。後復有所見。速告我。勿隱爲也。慰諭甚至。其人稽首謝恩而去。正信曰。彼所謂略無足取者。君何賜感賞之深也。公不悅。曰。否。凡人自知過者鮮矣。況有國有家者。群臣先意承色。唯其言之無違。能犯顏強諫者。未之有也。且自古剛愎悖諫。以亡家國。為世僇笑者。何限。今彼則居常記載。欲得聞以規我。其設心豈非忠乎。吾取其愛我而已。寧復遑問其言有取與否哉。又嘗語左右曰。為人臣。能犯顏強諫。踰於臨陣先登

遠矣。何則挺身先登。幸建殊功。褒寵疊至。進爵益邑。遺澤施後嗣。縱死猶不失當世顯名。若夫諫者則不然。其君方違道縱欲。而敢直言不忌。必干威怒。身死妻子為戮者。十常居八九。故先登陷陣。好名好利者猶或為之。至於進諫。非愛身私妻子者所能為也。故人主豈得不貴忠讜之士乎。

永禄十二年。佐々木承禎。柴田勝家が守る所は長光寺の城をかこみて攻る。遂に惣がまへを打破る。勝家本丸に在て爰を専途と防戦ふ。郷民佐々木が陣にゆきて。此城は水の手遠く。遥なる所より水をとり候。それをとり切る程ならば城は保つべからずと告しらせければ。承禎悦て。水の手をとり切りけり。城中是に困めらるよしある色をはかりきかん。承禎これを見ん為に和平せんとて平井甚介を使にして。城中に入たり。平井勝家に對面し。手水を請ふ。缸に水みちみちたるを。小姓両人してかき出しけるに。平井手を洗ひければ。小姓残れる水を庭にすてけり。平井帰てかくといへぞ。事のたがひける故に。はやしみはつりかくて城中既に水竭たれば。勝家明日は討て出。切死にせ

んとて諸士をあつめ最期の酒宴に残れる水を問へば二斛計入なる缸をとり出さしむ此間の渇をやめよとて人々汲のみてければ勝家眉尖刀の石づきにて缸を碎きけり夜明方に門を開打て出る佐々木思ひもよらざれば大に敗北しりぞけば勝家首八百餘級を得て岐阜に獻じ勝家は猶長光寺にあり信長感狀をおくり勝家を賞せられし事大方ならず是より勝家を缸わり柴田と世に稱しけり。

柴田勝家守長光寺城。佐々木承禎攻之。入其郭。勝家退保于牙城。村民或謂承禎。城中無水。常取之于外。君若絶其汲道。豈得復保城乎。承禎從之。居數日。略無困病狀。承禎佯使其臣平井甚介行成。因欲以察虛實。平井入城見勝家。請盥。勝家使盛水於甕。二侍臣舁以出。已盥。覆餘于庭。平井還具以狀告。衆皆異之。已而城中水竭。勝家夜屬其衆謂曰。明旦與卿等力戰而死。遂置酒高會。問猶有餘水否。左右舁一大甕至。貯水可二斛。勝家曰。卿等何不飽飲以解渴。衆已飲。勝家即取眉尖刀。以鐓撞破甕。天明開門突戰。承禎兵出不意。皆驚潰。勝家乗勝斬首八百餘級。使使獻捷岐阜。織田右府賜書褒

賞甚至時人因號勝家曰破甕柴田。

信長江州小谷の城を攻淺井長政勢盡て既に自害せんとする時不破河内を以て緣者のよしみ。降參あらば疎意あらじと云はせらるに長政降參をすゝき志に非るを近習の士ども。よも別の子細も候まじ城を出て運を開るも候つといふ。さらば父下野守も共に疎意なくば降參せんとて城を出るを信長見て長政何の面目有て今更の降參ぞと高聲に呼はらしせしかば長政怠て赤尾美作か宅に入て自殺せり淺井石見赤尾

美作いざ切死せんとてうけ入たるを多兵押隔て生取て信長の前に出しは信長汝等長政をそゝめ朝倉にくみして吾を敵となしたる果を見よと罵られしに淺井居直て事新しき事を承候ものかな義景を別事なく立置んとの誓文其血もいまだかわかざるに越前に軍を出し是によりて長政義の當る處にて義景に與しより今日城を出し疎意あらじといはれたる詞を押ちるうち只自害と一すぢに決したるに若天運によりて家を立るならば信長を斷のこと〳〵め

んと思しよらく成らり義を知ば恥を知らさる
は信長こそ人面獸心なれといへば信長彌怒て
汝詞にも似ず生きるはいかにと罵らる
ゝに年老ぬれば力に及ばず昔より士の生捕と
なる事恥になからば武勇を以て敵を討得そいつ
きぬたらぞなして人の國を亡ぼこそ恥なれ見ら
れなば必下人に首を切らるべしと罵り返せば信
長杖を以て打れしに石見打笑ひうちぬらる者
ようなるそうらひあつそれなき大將の禮儀ら
ないかなどなりてや犬坊と罵りたるが石見も

美作も終に殺されけり。

織田右府圖浅井長政於小谷。長政力竭將自殺。右府使不破河内諭之。曰君若忝見臨。寡人亦以姻戚之故。不敢有違忤也。於是左右交勸長政曰。右府亦非必有他意。不如且降以為後圖。長政曰。大人亦得無虞。吾獨不能忍詬出降乎。乃請降。右府望見長政出城。颺言曰。卿何面目乃出降也。長政聞之怒。遂自盡於赤尾美作家。美作與浅井石見。怒曰。寧力鬪而死。直進犯陣。衆擁見右府。右府罵曰。汝等勸長政與越合從以敵我。今果如何。石見正色曰。君何出此言。君嘗與越約無有相害。

畫出一個銭漢

歃血以盟。曾未及乾。乃遽加兵於越。寡君世為越與國。豈得不仗義趨急。出死力以相救乎。今君又誘寡君出降。臣固知君非善意。欲退就死。特以天或祚寡君。得保宗社。他日興兵復與君遇於中原。必得以今之見困辱者待君。不幸力不足。遂至于此。夫棄義忘耻。蓄虎狼之心。寧有若於君者乎。右府怒曰。汝言如此。廼為囚虜。何也。石見曰。臣老羸不免為兵衆所制。然自古士之就縛執者多矣。非所以為耻也。至於不能鬪勇。徒權譎詭詐。以亡人家國。豈非耻之大者乎。臣固知君一旦勢窮。授首于奴隷也。右府益怒。以杖撃之。石見笑曰。狗兒狗兒。

任汝撻之。夫已就執縛而撻之。為將之禮固如此乎。狗兒盍取於歌謠詞。以譏右府。遂與美作皆遇害。

長尾輝虎の幼名を猿松と申し

輝虎始ハ景虎といふ。後京ニ上られし時。公方より輝の字を賜て。輝虎と稱し。鎮守府將軍良兼四代の孫。左衛門尉致經二男。村岡五郎忠通が末ニて。其後長尾と稱し。後管領上杉の譲を得て。上杉と稱し。甲陽軍鑑ニ。梶原景時が末孫といへるハ誤也。

兒を三郎といふ。猿松にハ〜者ニて。父為景の心ニ

そむく。是繼母の讒言故とぞ聞へし。かくて出家にせよとて。下越後の椽原淨安寺に追やらるゝに。金津新兵衛供して米山越にかゝる時。猿松八歳なれバ。かちの士背にかき負て山を登り。嶺なる堂にかり居て破籠(ワリゴ)やうのものとり出しまゐらせけり。猿松遥に頸城府内を眺やりやゝうち涙ぐみて。我かくおちぶるゝ事こそくちをしけれ。やがて軍をおこして志をとぐるならバ。此山によぢ登り。府内を目の下に見おろすべし。志うるべき軍の地なりといはれしかバ。乳母子なる本條美作守も。舌をふるひ。其詞なるをきたまひそと悦びけり。

一説に。為景猿松を憎みて。其傳城越前守にあづけらる。此時十二歳。それより諸國をめぐりて。風俗を見人情を察し。地の利を窺ふといへり。

かくて。猿松九年の間寺にありとも。僧になるべき志なし。天文十四年。為景越中にて討死あり。嫡子三郎暗弱にて。越後亂れ。所々を敵に掠奪れたりしかバ。父の弔軍せんと思ひ立。宇佐美駿河守

定行をあらそひ。天文十六年正月。十八歳にて元服し。平三景虎と名のり。椽尾(ツルヲ)の城に旗をかゝげたり。三郎是を聞。長尾越前守政景に。七千の兵をそへて攻うたしむ。景虎矢倉にのりて。敵は今夜引すべき物色なりと。いさめけるを定行聞て。さるくと攻来り。空しく退くべきやといふ。景虎敵に小荷駄なし。久しく圍むべき計にあらず。ひき退ん處を撃は。勝こと疑なしと。いさめしが。定行も然るべしとて。夜半に打て出る。果して政景の軍みだれたちて敗北しけり。三郎又打

向ふ。景虎栃崎の下濱に陣をとり。やがて三郎を打やぶる。三郎府内をさして引退く時。景虎米山の東坂本にて。我ねむり氣ざしたり。休て後追うとぞやとて。小家に入る。定行なる處もなし。とく追討あらんは。破竹(ハチク)の勢とは是なるべし。といへども。高いびきかきて。眠られしかば。皆あきるゝ時を。失ふ事にしとなきはつまで。やゝ有て。景虎つと起あがり。三郎の軍兵。山を三分の一あまるに。越えりと覺ゆ。いざ追討(テ)やとて。馬にのり螺の貝吹たてさせ。龜破坂よりおとしかけ。大に打勝ける

り。定行がふ北るを撃つき時ゐら眠せられしハ。山を追上らんよ。敵をかさよりけなバ利有べからバ。敵下り坂よなりて。引立たるをうらんとの事なり。是老臣等が及ふ所きよあらバ。ことしハわづか十八歳。弓箭をとる事。誰やの人か肩をならべふんとぞ。かくりける。景虎越後を治め得て。高野山よ出奔せんとしバ。長尾家の長臣相集り。景虎なくハ。國を敵よ奪るべし。いざとて。闕の山よおひ行て。さまくよとゞめりきバ。景虎のいきく。我年ごろく威重うしバ。老臣等我を輕せし。國の根本立バ。此國人の為よ利を求るハ。我身の害をまねくなり。是より後。吾命を背くまじとあらバ。神文を書て得させよ。さらバハとゞまらじと。いひきかされも。とよも。君と仰き奉るべきなり。いかて命を叛き申べきと申かきバ。さらバとて立歸り。三郎を隠居させ。是より威をふるひ。越中よ攻入て。父の吊軍とがらきけり。長臣の中よ二心ある者を。林泉寺といふ處よて腹切せて。國を治めらきけて。晩年謙信と稱しぬ。

上杉謙信。其先出鎮守府將軍良兼。良兼四世孫致經

一直瀉下略無著力處惟不見一點和人口氣亦不足貴乎

第二子曰忠通其後世爲長尾氏傳至謙信屬管領上杉氏之衰命冒其姓遂以上杉為族謙信幼有異資父為景惑於後妻言惡之令入據原淨安寺為僧生八年矣金津新兵衛送之士負攀氷山巳至巔就小祠憩發厨進食於是為景邑於頸城謙信俯瞰城郭潸然出涕曰吾流落至此為憾多矣他日興兵據此山得以濟我事此豈非便地乎本條美作守為謙信乳母子亦從曰郎君願勿忘斯言謙信在寺九年猶無意披剃已而為景戰死於中越長子三郎承後昏懦失於撫御擧國大亂境土日蹙謙信密與宇佐美定行謀欲唱義為父復讐天文十六年謙信年十八正月擧兵於栃尾三郎聞之使長尾政景將七千人來擊謙信從城樓望見曰政景今夜必引歸定行曰彼遠出兵今方至矣何遽退為謙信曰否軍無輜重非持久者若候其且引去擊之敗之必矣定行曰然夜半開門出戰政景大敗走歸三郎復來攻謙信進軍於栃崎復擊敗三郎兵追至米山東麓曰吾欲睡且一覺而後戰定行曰君安得如此令乘勝急追所謂破竹之勢也謙信不聽遂引枕鼾睡衆皆以不亟追為恨少頃謙信醒曰度我兄已踰嶺急追之可也即起上馬吹螺為號督兵以進自龜破坂馳下復

經畫略定即適去與戰酣鼾睡皆洞悉後當如此姑為權譎以籠羈人心抑亦所以徼取威定基之速前後寫得亦極透徹

大敗之定行歎曰敵方攀山故且就睡待其踰嶺而後追擊敗之我君今年十八而已即善戰如此天下誰復爭衡者非吾儕所及也謙信已討定四境將適於高野山越諸臣議曰公子不在國且為敵割裂追至關山固請留保國謙信曰吾年少無威權諸大夫必至蔑我如是根本不立何以經國諸大夫所以為國秪禍我耳若欲必要我何不納載書以明無我違否吾不能復從大夫之命也皆曰群臣願奉君復何貳之為遂與俱歸奉三郎就老於別館謙信蒞國於是將兵入中越擊與父有仇者盡滅之已歸命大臣懷貳者皆賜死於林泉寺

謙信小字猿松將舉兵初冠名景虎後入京謁將軍光源公賜偏諱改輝虎晩削髮遂以假號行

輝虎ある夜石坂検校に平家をうたはせて聞きけるに鵺の段を聞てしきりに落涙せられけり。かたへの者どもあやしみ思ひけれは輝虎のいはく吾國の武徳も衰へたりとおぼゆるなり。昔鳥羽院の御時禁中に妖怪ありしに八幡太郎鳴弦して鎮守府將軍源義家と名のりければ妖忽消ぬといへり。其後頼政鵺を射たれども猶死せずして井野隼人さし殺してとゞめたると聞ゆ。義家

鳴弦せしは天仁元年の事なり。鵺の出しは近衛院仁平三年なれば僅に四十六年なるに。武徳既におとろへたる事かくのごとし。今又頼政におくるゝ事四百五十年。されど又頼政におとる事遠かるべからず。されば涙の流るゝにとぞ語られける。
又相似たる物語あり附記す。相州北條の幕下。佐野城主天徳寺勇将なりしに。ある時琵琶法師に。平家を語らせて聞けるに。いまだ語らぬ先にこれは唯あはれなることを聞度こそあれ。其心得せよといひしに。法師承候とて。佐々木高綱が宇

治川の先陣を語り出だしけるに。天徳寺雨雫(シヅク)と涙をながして泣かれけりさて又今一曲前のごとくあはれなる事を聞きしといへば。那須与一が扇は的をいたる半に及て。天徳寺また落涙数行に及べり。後日に側に仕へし者ども。過にし日は平家はいかゞ聞つるといふに。皆面白き事に覚へ候。但し一つ心得ぬ事こそ候へ。二曲ともに勇氣功名なることにて。あはれなることこそ少しも候はぬに。君には御感涙にむせばせられ候。今に不審なることゝ申あひ候といへば。天徳寺驚

れて只今迄は各を頼母しく思ひ候ひしが今の
一言にて力を落したるぞとよ先佐々木が事を
よく心にかけて見られ候へ右大将舎弟の蒲
冠者にも賜はらざりし寵臣の梶原にも賜らぬ生
唼を高綱に賜はるにあらずや其甲斐もなく此
馬にて宇治川の先陣せずして人に先をこされな
ば必討死してふたゝび帰るまじき暇乞して
出たる其志ほどならぬ事かはとて志ふかく涙
をのごひ給へ志ざしあつていひたるは又那須
與一も人多き中より選ばれて只一騎陣頭に出

しより馬を海中に乗入て的にむかふに至るま
て源平両家鳴をしづめて是を見物しもし射損
しなば味方の名折なるべし馬上にて腹かき切
て海に入んと思ひ定めたる志を察して見られ
よ弓箭とる道はなどかきたるもはかりしきは
い毎も戦場に臨ては高綱宗高が心にて鎗を取
候も右の平家を聞時も両人の心を思ひやり
落涙にたへざりし然るに各はいたづらにあたり
しとや思ふに各の武邉は只一旦の勇氣にまか
せて真實より出るにてはなきにやと思はれ候。

夫よてハ頼毋しう～びとなげきりおことぞ。

上杉謙信夜命石坂檢校歌古曲。至源頼政射鵺。歔欷不自勝。左右異之。謙信曰。嗚呼古今威武之不相及。一至于此也。昔者鳥羽帝時。宮中夜有妖。源義家暗中鳴弦。自稱職官名姓。妖即止。至於頼政射鵺。一發猶不能獲。其臣井野隼人捕而殺之云。夫義家事在天仁元年。而頼政射鵺為仁平三年。相距特四十六年耳。而頼政之遜於義家。固已如此。令也距頼政纔四百五十年。我亦不及頼政遠甚。思威武之益下於往昔。是亦不足哀乎。先是北條氏盛時。其將天德寺守佐野城。以勇聞。亦

彈琵琶和云々原文所無然得数句前後始覚精彩則要不可無此添補也

乍聞侍者言絶不與已意相入不覺嘆一驚情狀躍然紙上

嘗召瞽者歌古曲。曰。卿為我擇悲壯慷慨足泣人者歌之。瞽者曰。諾。為歌佐々木高綱先登渉宇治河。彈琵琶和之。且彈且歌。俯仰嗚咽。天德寺聽之。感傷泣涕雨下。已畢。更命歌一曲。瞽者又歌那須宗高射扇。且半。天德寺亦悲泣。幾乎不能終曲。他日問侍者曰。卿等往聽歌古曲。意以為如何。皆曰。樂甚。抑往所歌。皆壯士赴戰。意氣豪儁。自雄於一世。復何所哀。而君獨若不免悲懐者。臣等至今異之。敢問何故。天德寺驚曰。初吾以卿等足與有為。今聞卿等言。我深有慊焉。且卿等獨不思高綱赴戰之勤乎。夫生啖者天下之良馬也。源右將軍範頼。

如聞天德寺嗚咽涕泣之聲

勇士赴戰孰不以死自分者但耆々乎高綱等感殊遇致身鋒鏑

與其所最愛幸梶原景時請之皆不與特以賜高綱高綱巳獲此良馬若不能先衆渉河遷延出於他人下復何面目歸見右將乎彼其臨發拜辭固巳決死必矣吾毎一思之豈得不惕然于懷乎語未畢涕泗交頤少焉又曰那須宗高亦何異于此夫源廷尉拔宗高於衆中命以射扇於是攬轡出自陣頭入於海是時也兩軍數萬皆罷戰觀之宗高意葢以為若不能射扇非特為吾之耻旋及我三軍果然獨有馬上刲腹以投於海而巳吾亦思其蚤自決死人固無哀於厠身戎行者吾毎臨陣執槍未甞不思高綱宗高之勤於赴戰以自奮勵故

是天德寺之言所以千載動人

聽聲者歌之不復覺涕之隕于襟也卿等是之不思聽歌曲猶恝然若不與巳相關者顧卿等能効力軍前者特血氣之勇袮非有得之於心也如此吾亦獨得無慊于心乎悵然久之

大坂夏の軍ハ水野日向守勝成よ大和口先陣の大將を命ぜられ堀丹後守直寄松倉豊後守重政大和口ニ向ふ五月五日夜ふけて勝成敵よせ来るを見つて松明多く見ゆ懈るへからさるよしを諸將よいひ遣いを丹後守聞て日向守ハ物よあきとゝると聞しよ功者ともおもハまん寄来る

簡潔之極眞之彼邦人属辭中豈得遽辨識

敵何ぞ松明を多くとぼさんや。敵はひそ〳〵と
いふ處に日向守又使を以て。松明みな消たで敵
はひそ〳〵と告知せしかバ丹後守さてハ敵な
り。何ごゝろもなくて火をとぼしつきたるが功
者ありて消させたるならんといひきしが。果し
て後藤又兵衛なりけり。

大坂之役。水野勝成為大和口先鋒。堀直寄松倉重政
屬焉。五月五日。夜深見炬火燭天。勝成虞城兵来襲。令
諸將急為之備。直寄曰。敵兵来襲。何多攜炬為。吾嘗聞
日州善於應敵。殊不然也。有頃。炬火不復見。勝成又令

曰。前者誤耳。非敵也。直寄曰。是敵軍有習兵者。知携炬
非謀遽滅之耳。宜急為備。已而城兵大至。果後藤基次
也。

秀吉信長の使者として荒木村重が有岡の城に
來る。村重が士河原林越後守治冬。猿めがゐ〳〵た
ましひ。遂にはゐことをなんべし。令刺殺ん事易か
らんと。村重にさゝやきけれども。村重聞入ず。此
事を秀吉に語りければ。秀吉治冬を呼出して。懇
に詞をかけ。さしたる脇指を抜て引出物にそし
さまゝる。村重指替のなくしてといへば。秀吉吾刀

一つを頼みて信長に奉公する者に非すといは
きりて後秀吉世を平げて治冬を深く惡みさ
し出して殺さまくるに治冬君の為に其仇を除
くは武士の常の事なり秀吉舊き怨を忘れく無
道なりといひて死しまりき

豐公爲織田右府使於荒木村重村重臣河原林治冬
附耳語曰沐猴終將不利於君令刺之非難也村重不
聽遂止已而以狀告公乃召治冬慰諭甚至釋副刀賜
之村重曰君有別具刀乎公對曰僕豈頼一刀之利者
哉然公深銜治冬及天下已定求而誅之治冬曰爲君

紹成書院藏

錯綜而成勢如常山之蛇

除惡武之職也今乃不能忘舊怨横害忠良豈爲得道
乎遂死

野史氏曰昔者韓安國以梁中大夫坐法抵罪蒙獄
吏田甲辱之及起爲内史卒善遇之而李廣之失官
家居夜出從人田間飲還至霸陵霸陵尉醉呵止廣
宿亭下已而廣又拜右北平太守即請尉與俱至軍
斬之君子以爲安國之於田甲猶韓淮陰之於屠中
少年其寛厚固足貴獨廣則狹中區區不能釋憾於
一尉因深爲廣惜之余亦嘗觀豐太閤之爲人豁如
大度頗類漢高帝而雄才大略遠出其右尚詎淮陰

紹成書院藏

豊太閤盛勲大烈照映千古而史氏則吹求至此其意實為大閤惜非貶大閤抑亦忠厚之至也

安國廣輩之問哉。獨怪太閤之於治冬不免與廣同其失。非獨不能如高帝赦李布。比之淮陰安國其不相及亦遠矣。且也治冬之所以取怨於太閤者要為其主亦猶李布之於高帝。固非田甲及屠中少年覇陵尉一時出乎戲謔者比。夫高帝固勿論也。廼至淮陰安國猶卓卓如彼。獨太閤則不能容一治冬亦不知其何故也。論者或以廣不俟歸罪於殺尉。余以爲太閤一傳乃至絶祀亦安知非横害忠良之禍哉。

長久手の軍に水野忠重の嫡子勝成は。目を病て冑を著ず。鉢巻しけるを父見て汝が冑はめそを壺にこもるかと罵りしかば。父ながら餘りの詞かな。真先かけて首を取り吾首を敵にとらるゝな。二つの中にといふまゝに。馬引寄て打乗。もろ鐙をあてゝかけ出し。忠重はきはいかなとて。太田重助といふ士をして呼帰さしむれども。耳にも聞入ず。又水野喜右衛門をせ来て引とめんとするを。勝成さらにこ眄て。疊の上の諫は聞も入べし。只今大軍の中にかけ入。功名せん時止まるとて引返す様や有といひすてゝ。秀次の将。白井備後守が陣に突

てゝ、甲冑首をとりてみせ帰る。此日の一番首なり。勝成かゝる者にて。人を物ともせず。忠重の心に忤ひ。虚無僧となりて。國々をめぐりて。武者修行せし。後に忠重死して。東照宮勝成に三州苅谷を賜はり。日向守と稱して。大坂の時。大和口の先陣として。大功有し人なり。勝成十萬石を賜ひて後。愈士に下り。身をいやしくしてすべて士に貴賤はなきもの也。主君となり従者となる。互に頼みあひてこそ。世はたつ習ひなれ。されば大事の時は。身をすてゝ忠義をなすことぞかし。汝等我をば親と思ふべきよ。我汝たちを子と思はんと。常に士にいひきかせり。年老て鷹野に出る時。行歩かなはねば。蒲團にのせて士にかゝせ。士番所にてはふとん共に下に居て。年寄ての鷹狩なかりしなるべし。鳥とらん為にはあらじ。心あれば此事なれと度々いひて打過られけり。或時鷹狩の野にて。昔勝成に仕へし士を見かけ。いかになつかしや。我方にて禄三百石なりしに。立去て越前にて千石の禄と聞。今爰に来られしはいかにと問に。彼士仰

の通禄ハ越前にて増候へども殿の下をいと
より懇にもてなしのふなどみ禄にハ換がたく
暇乞うて帰り候ひぬと申せバ勝成大に悦
ひ折にふれ思ひ出せしなりとて即日に禄を
増與へられけりその後勝成隠居して又鷹狩
の時彼士の家は門閉たるを見ていかにと問
るしに美作守の心に背く事有て暇を乞走り
ぬと答へしかバ彼者ハ越前の禄千石を捨て
小禄の我家を志たひて帰りし者なるにいか
に作州ハ思へるにや。かくいふ勝成ハ若き時

心得過て武蔵が金川根笹流の弟子となり尺
八一本携へて虚無僧となりて日本國をめぐ
り或時ハ堂塔に夜を明し或時ハ野にも山に
も日を暮し様々に艱難にあひ人にも誹られ
しが一言虚妄をいふ事なし不仁のふるまひ
せざりし故にや今福山十萬石を賜りぬ然れ
ども下の情を志れることハこれ虚無僧たりし
故なり返す〲も惜むべき士を失ひぬるに美
作ハ下の事ハ志られぬぞかしすべてよき士
ハ主君又ハ頭の下知をも無理なる事ハ心服

水野侯少壯勇決與夫經

せんたゞ一少しの過ありとも。能士ハ二度も
三度も知らぬ体して猶己がこゝハ傍輩ニ諫
させんものを。美作の政事なげかしきぞかし。
泣をよゝとかや。

長久手之役。水野忠重長子勝成有目疾。帕首而不胄。
忠重見之。罵曰。汝得無非以胄為弱器乎。勝成艴然曰。
君何為出此言。臣止有先登獲敵。否為敵所馘耳。遂上馬
馳去。忠重令大田重助止之。不聽。水野喜右亦至。固止
之。勝成叱曰。平時閑語。或有聽卿。今將馳敵軍建殊功。
復何用卿為。遂單騎冒關白秀次將白井備後守陣。獲

涉艱阻者老潦倒思往傷今歔欷惻怛之情皆極力摸寫前後相照映莫不筆々精熟此吾兄尤擅長處

甲首一。是日首功無有先於勝成者。勝成性兇猛傲物。
為父所逐。出遊四方。及父卒。東照公召封之苅屋。號日
向守。從攻大坂。為大和口先鋒。有功。勝成已受封。折節
下士。常謂群臣曰。士豈有貴賤哉。約為君臣。要在相輔
而濟。故履危死綏。以效忠貞之節。亦以此也。吾視卿等
猶子。卿等豈得不視我猶父乎。好出郊放鷹。年老弱行。
猶坐大蓐。令數人舁之。過郊門。輒令置蓐於地。謂士人
守望者曰。老羸行獵。卿等得無以為俳笑乎。然吾意非
特欲獲禽也。如此者屢矣。嘗在郊。遇其故臣。曰。卿往事
於我。食祿特三百石而已。聞近者委質越藩。益至千石。

我思卿未嘗忘于懐不知卿復何以至此也對曰臣在越叨糜廩禄有倍於舊特以君嘗愛恤群臣恩意隆洽臣實牽戀舊德勿復以禄仕為遂致仕而去願得自放於左右勝成大喜即日命益禄復為臣如初及勝成告老讓國嗣子作州又出郊過其家見門墻牢鎖問之曰頃失新君旨棄禄而去勝成嘆曰彼棄千石之俸復来歸於我今又不知其所之吾兒象心果何如也且吾少獲罪先君往武州金川從根笹氏學洞簫遂為僧巡遊天下行乞自給備嘗艱難至露卧山野以過夜屢為人所誹毀然吾之於物未嘗虛妄相欺汰虐相凌於是乎狠天寵靈得受封大邑顧我之能知下情者以為僧漫游也今孺子以纖介之故遽失良士坐不知下情耳夫士之良者待之或不得道其心不服故有過吾則陽為不知以俟其自悔改如此三數猶弗悛使所親微規之人主待士當以此為法孺子廼如此豈可勝嘆哉意甚悵恨至流涕云

東照宮長久手の軍に勝せ給ひ勢州蟹江の城前田與十郎を御攻有らんとて打向はせ給ふ所に加勢多く馳入りたるを御覧じて敵いかほども城中へ入よと仰られしを酒井左衛門尉忠次承て

何とて押留られぬぞやと申ハ。東照宮いかゞ思ふぞと。御尋ありしかバ。忠次城ハ堅固なり。多勢にもあらねバ。争か攻落さるべき。いかなる御心か候と申ハを聞召。大將謀を云やうや有と。仰られけるが。其後援兵の乗来りける船を追拂はせ。粮道を絶せられバ。粮忽乏しく成て城を渡し降參したり。東照宮四十二歳の御時なりとかや。

長久手之役。東照公已敗走西軍。更引兵攻前田與十郎蟹江。於是入援者甚衆。公曰無禦。使敵得多入城。可也。酒井忠次曰。君何不禦西軍。公曰。卿以為如何。曰。城已固。若衆入。保安得急抜之。臣不知君謀何出也。公曰。為將豈得輕以謀告人乎。初援兵皆乗船而至。公遣兵撃盡走之。因絶其糧道。頃之。城中食竭。皆出降。公年四十二時事也。

天正十三年三月。東照宮濱松の城にて。疔を病せたまひ。近習の若き人に膿を強く押せたまひしにより痛み甚しくすでに事切させたまふと。城下にハ申さる程の事なりけり。今ハかうとや思召けん。御遺言を仰出されしに。本多作左衛門重次參りて。先年臣を療養せし糟谷政利入道長閑が藥を

付させらるまじと申けれども。聞し召入させられ
ざりしかば。作左衛門大いに怒り。殿は徒に死しける
いんに。此作左衛門は年老ぬれば只今自害して
待奉るべしとて坐を立たるを御覧じて。いかに
作左衛門氣狂ひさるか。未だながらへたるに自害
とは何事ぞ。吾なからん後こそ大事なれと。仰ら
れし時。作左衛門夫は人によりてその事に候。若き
時より幾度となき軍場に數ヶ所の手を負。世の
中の畸(カタハ)といふ畸は身一人によりあげ候ひぬ。今日
まで殿の御情(ナサケ)にて。人がましくも候也。只今殿過

きさせ候ひなば北條を始として。敵國よりも攻来
らんに。殿におくれを奉りなるべく軍する者や
候べき。國は忽滅亡すべし。其時作左衛門は路の
邊に饑死せん。ながらへたらば何れにても徳川家
に奉公せし本多作左衛門に何を頼みになからん
つらるなど。人に朝りを笑はるべし。近き頃武田の
内にて。甘利殿とて。人の敬ひさる人も。武田の運
盡ぬれば。今は本多平八郎が組となりうがまま
居るを見るも哀なれ。是は人の上ならば。勝頼の
不道にて滅したるも。殿の藥をきらひかかるも。同

此篇諸書所載互有異同頼氏外史亦似據此書稍為刪減者至屬辭乃拙覽者自知之

し理に候と申せバ東照宮尤也とて長閑を召頓て藥を奉り灸を大にして作左衛門をも奉りタまバ夫よりて痛もやゝ輕くなりせめひタまバ作左衛門聲を上泣て悦びしとぞ

天正十三年三月東照公在濵松患疔使左右按取膿。於是腫痛益劇。公自以不救召群臣屬以後事本多重次曰往年糟谷長閑為臣治此疾君亦使長閑藥之可也公不聽重次艴然曰君疾必有不可諱臣老矣請先自殺以待君於地下言畢起去公召之曰汝病狂乎何遽自殺為且吾死之後汝等豈不可戮力以保國乎重次曰保國者自當有其人若臣小少從軍被數十創舉世所謂殘疾者聚之臣躬矣特以君眷愛至今猶得備下僚君若棄群臣四隣諸侯舉兵来伐誰復力戰拒敵者一旦社稷淪喪臣必不免彷徨餓死道塗否為人所揶揄曰彼故事參河者今何廼爾臣與其如此不如速自殺之為愈也甘利昌連之在甲人莫不崇敬今則降隷於本多忠勝臣嘗哀之此豈獨哀昌連而已哉且君忌醫不肯治疾與勝頼酷暴亡國何擇公曰善即召長閑進藥重次為置大丈於疔上灸之痛稍減重次喜極不覺啼哭

台徳院殿。太田某に五百石の禄を賜りし時。太田折紙を擲ちつし退出したるを。死罪と思召たるに井上主計頭正就。駿府に申て後。罪を定められ候へと申ければ。さらばとて。井上駿府に参りて東照宮にかくと申を聞し召。泰平久しかるべき基なり。太田ハ誠に無禮なり。凡賞罰中らざれバ。下の恨みハ常の事にて。太田も無禮とハ知たらん。已が身をすてゝ諫る心ならバ。臣下の直言して諫る者。怒に逢て刑罰せられ。家を亡し。大軍の中にかけ入る者ハ。多くハ身を全うして功名を立つ。故に昔より諫臣を忠の第一とせり。然るに今太田にかぎらず禄賞に中らざるやと。汝を以て問はるゝ事。政務に心を盡さるゝなれば。泰平の基と謂ふてこそあれ。汝にものがこやせん事なかれ。さき三河にて池の鯉を。鈴木久三郎が取て烹て喰ひ。信長より賜ひし酒をも。とまにひらくへしかりとぞ。それもふさまに飲たりき。吾怒て眉尖刀を提。鈴木を呼しに。鈴木肌をぬぎ。大音をあげて。魚に人を替る不道にて。天下に旗揚んとは。思ひもよらぬと罵りし時。予鈴木が詞に感伏して内に入。

はく思ふに走りの者池にて鳥を取し罪にてとぢめ置しを諫ん為ならんと心付て走りの者を赦し鈴木を近付汝が志返々く悦しきといひしかバ鈴木涙を流し密に申べき事を今戦國の時ならバ手ひろしたるがよきと存候て無禮の詞を申せしまでゝる仰を承りて辱きの身にあまりて候といひし也今太田にも三千石の禄を給はらせよとて井上をとゞめのひ御刀を賜いましかバ江戸に帰りてかくと申バ太田にも禄を増賜いりしかバ涙を流して喜ひきや台徳院

東照公明睿察見事狀表裏洞然猶為温言慰藉以調御嗣君不得我違而吾兄記之亦略無露端倪巧々

殿井上まい汝が詞よりて孝行を知り賞罰の道をさきまへたりと仰有て左文字の刀を賜まなり。

台徳公賜太田秩五百石太田怫然擲還書起去公怒將誅之井上正就曰請告於駿府而後行刑乃遣正就報狀東照公悦曰吾令而後知將軍能保治安也夫賞罰不中群臣懐怨固其所也顧太田亦非不知鈇於禮敬特欲殺身以強諫耳大抵為人臣犯顔抗言必干威怒誅不旋踵遂至亡家而冐陣死戰反全軀命榮耀延世者往往有焉自古重忠讜之士者以此也令將軍虞

初學文範 巻之一 三十六 紹成書院蔵

太田賞不酬勞。特遣汝来咨。用意治道如此。豈非國家無疆之休乎。居吾語汝。吾少壯在參河時。有鈴木久三郎。捕池中鯉魚。烹而食之。又飲織田右府所贈美酒。略盡。吾即提眉尖刀。將戮鈴木。鈴木肉袒勵聲曰。以一魚之故殺人。允逆如此。寧得復稱雄於四海乎。吾聞之悟。遂入內。先是有走卒捕池中鳥。繫獄者。吾知鈴木意在諫之。亟命赦捕鳥者。更召鈴木。慰諭曰。吾極知卿忠義。語未畢。鈴木頓首流涕曰。臣理當容進言。特以隣國紛爭。日事干戈。納諫亦宜以剛勵將之。遂至發狂言不意。蒙君特恩。臣死且不朽。今太田亦如此。卿謂將軍益賜三千石可也。因留正就。賜以寶刀。正就還具以東照公言聞。於是益賜太田秩三千石。太田乃涕泣拜賜。公謂正就曰。由卿言得事親之道。又因以明賞罰之法。特賜左文字寶刀。以賞之。

安藝中納言毛利輝元ハ。關ヶ原の時。秀家と共に。徳川家に弓箭を取れしかとも。關ヶ原に自ら赴かさるの故に。安藝備後等の國を削られ。長門周防兩州を賜りしを。是より前小早川隆景遺訓して。輝元を諫められし中に。毛利家五十餘郡を領し。富貴誠に溢れたりといふべし。此よりは後。苟

にも國を貪る心あらバ。忽滅ぶべきにと。いまし
めおきしに。輝元隆景の戒を忘れ果して國を削
られたりき。隆景ハ先見の明かなる。露もたがハざ
りけり。隆景ハ武勇のみならず智謀にもすぐれ
たり。父元就病重くなりて。其子を集め兄弟の數
ほど箭を取寄せ。多くの矢を一つにして折らせ
んには。細き物も折がたし。一筋づゝうちて。折
たらむには。たやすく折るに。兄弟心を同くして
相親むべしと遺言せられけるに。隆景其時爭ハ欲
より起り候。欲をやめて。義を守らバ兄弟の不和

候まじといはれしかば。元就悦びて。隆景の詞に
從ふべしといはれしとぞ。秀吉九州を討平げら
れて後。筑前五十万石を小早川にあたへられし
に。隆景これハ吾に過たる事なり。此頃まで敵な
りし身に。大國をあたへらるゝハ。吾を愛せらるゝに
非ず。九州をなつけん為のかりの謀なりと思ひて。
秀詮に國を讓り。備後の三原に引こもられしと
なり。

關原之役。毛利輝元首應西軍。及敗。東照公以其不躬
莅陣。特宥之。削六州。獨存長防二州而已。前是小早川

隆景臨終諫輝元曰我提封五十餘郡富強足矣今後君慎勿爭地進取為若然是自速禍也至是果如其言隆景非獨以材武顯最有識度初其父元就疾病盡召諸公子使取矢如兄弟數曰矢雖小聚之為一不可得折若一一而折之亦非難也汝等兄弟頗有與此相似者吾死同心協力和輯以保國隆景曰爭生于貪苟窒欲安分無由而開釁也元就悅謂諸公子曰汝等宜以隆景言為戒及豐大閤討定九州封隆景前筑五十万石隆景曰吾與大閤為仇敵久矣今乃遽封以大邦是非愛我也特籍以懷柔九州諸豪耳吾不敢當於是固請公姪秀秋為嗣以國讓之退居于三原隆景深謀遠慮率此類

朝鮮にて秀家を始都城に在しに加藤清正進て行程數日を隔つ諸將粮盡んとする時加藤遠江守光泰獨云清正都城を放ちて敵に向ふ人々都城を去て食に就んとせハ清正を捨殺すべし今爰を去るものハ復男子の交ハならし清正を捨ん事日本の耻也といふ人々粮既に盡たりいかゞせんといひしかハ遠江守怒て砂を喰んものをといふ砂ハくらきしといへども遠江守居丈

高に成て汝等砂を喰ん樣にも志らし我教ふべきとて福島正則をきつと見て。いつに市松いつの間に大きに成たるぞやとて。又秀家に向て。今までハ中納言殿と敬ひ申たりきけふよりハ中納言めと申べし。清正を捨殺し耻を異國にさらを人々なりといひすてゝ坐を立處に清正粮盡て都城に引退き。三里計の近所に陣しけりと告来まり遠江守ハ清正と生死を同じくせんとおもへるにまぬかれきとぞ。

朝鮮之役。諸將方保于都城。獨加藤清正。引兵東北入咸鏡道數百里。已而城中糧竭。諸將議欲棄城退就食。加藤光泰曰。清正孤軍深入敵境。今去都城。是餧清正於敵矣。敢曰去者。非夫也。吾不能復與交歡。且委棄清正。豈不遺耻於異類乎。皆曰奈糧竭何。光泰勃然曰。糧竭食砂耳。曰砂不可食。光泰曰。公等未知食砂之方乎。我請教之。顧見福島正則。因呼其小字曰。市松。幾時𨒂爾長大也。又謂浮田秀家曰。初吾崇公。稱諸人必曰中納言殿。公即委棄清正。辱名於戎夷。吾將貶公曰中納言女。勿復崇公。為和言殿為尊稱。女讀如黙。甚疾惡之之聲。光泰言畢。即起去。意蓋欲與清正同生死。會清

正亦以糧盡退距都城三十里止舍。報至。遂得與倶就食。

石谷十藏定清ハ。先祖ハ遠江石谷村の人なり。大阪御出陣の時。江戸ニ殘させ給ひしニ御跡よりて。從者一人ニ具足箱を脊ニ負せ自ら鎗を荷ひて。潛ニ江戸を出駿府まで追付奉りけり。至て心易かりし御近習の人ニたよりて。江戸ニ殘り申事口惜く存。重き御法を破りて參りぬ。首を刎られん事ハ素より覺悟ある事なれハいかニ御咎蒙らんとも。露ばかりも悔む事ハ候まじと申上て。おはせ候へといひしかバ。將軍ニハ。殊ニ法制を嚴ニ思召さるなれバ。爭か御ゆるされの有べき。もし御宥あらんニハ。御あとよりぞ引つゞきて。追々ニ来るべくなれバ。必烈しき刑ニ行れなん。されども捨置べき事ならねバ。かくと申をニ。台德院殿默しておはしましぬ。十藏ハ既ニもれし事聞えつる上ハ。今夜か明朝ハ。首を刎られなんと。相待居たりしニ。十藏よべとて召されけり。思ひ極めて進ミ出れバ。如何して法を破りたるや。よき奴哉。切て棄べきやと思へども若き者なれバゆるするを

よと仰出されて黄金二枚賜はりきて江戸へい重ねて誰人にもあれ一人も忍ひて御供に參らんハ重罪たるべしと固く仰出されたるとなり。

石谷定清其先遠州石谷村人大坂之役留在江都巳而簏其甲使奴負之躬荷槍追及台徳公於駿府抵其友為近臣者請曰吾受命留在都無復效力軍前吾不勝至恨令也犯大憲而至自分誅殛但得因子聞之公而後就死吾所願也其人以公素重法令若聞定清必不免戮否後有繼至者無以處之然事不可中巳乃入以狀聞公默然定清知事既聞以為死在旦暮少頃公謂左右曰呼豎子至定清入見公曰豎子敢犯法令罪當斬所以得不死者為其尚壯特宥之耳賜以黄金二枚更馳使嚴令江都處守者勿得繼至

辻小作ハ福島正則に仕へしが可兒才藏と親しく深く共に世に聞えたる物しなり中黑道隨ハ石田賓客の如くもてなし置たり關ヶ原の軍敗れし時中黑唯一騎落行兵の中に蹈止まりさんくに戰ひけるを辻見ていざ討とらんやといへば可兒なさけなき事をもいふもの哉たゞそけなや

初學文範 巻之一 紹成書院藏

と云。辻さては生どもとや。可兒に好ませて辭し難しといひすてゝ。馳行ところに。中黒馬を深田に打入て。諸鐙を合せても更に動かず。辻詞をかけ。日頃のよしみに助んぞよ。早く取付とて鎗の鐏をさし出せば。中黒かゝるきはに。命助かりても何にかせんとて既に自害をすべく見えしかば。辻何とたがふるべきや。神明にかけていつはらじといへば。とりつきたるを。辻主従引かけて。陣所に歸る。可兒見て大に悦びける。さて辻は物具脱て躶になり。仰に打臥して。只今まで敵なりし中黒を。物とも思はぬ有様にて物語は。中黒あまりに悔まゐらすまじと。心中にいかほどたまるとも。命を助けられし恩を思ひて。さてやみぬと。後に中黒此事を語りて笑ひしとなり。中黒後井伊直孝招きて。禄二千石にてかゝへらきとぞ。

或説に。丹波山城谷出羽。篠野才藏。稻葉内匠。中黒道隨。渡邊勘兵衛。辻小作。兄弟の約束して。武勇を勵し。天下七兄弟と云しといふ。

逵小作事福島正則與可兒才藏友善皆以驍武顯中黒道隨亦與二人相識。石田三成愛中黒村勇待以賓

寫當時死士以兵為戲之風可謂逼真矣

禮。關原之役。三成兵皆敗走。中黑獨留戰甚苦。逵望見曰。吾且往擊殺之。才藏曰。吁子何忍也。吾必逸之。逵曰。卿豈欲我生獲之乎。果然吾亦安得自異。即馳去。中黑方陷于淖。屢躍馬不能出。逵曰。以與子有舊願得免子。倒槍授之鐏。中黑曰。事至于此。吾復何以生為。將自殺。逵曰。吾豈行詐者。質之神明可也。中黑乃援鎗出於淖。遂與俱歸。次可兒亦大悅。少頃逵釋甲錁而偃臥。與中黑言。甚自得。若不復以中黑寘眼底者。中黑意不樂。特以倚而得免。無敢發也。後為人言之大笑而止。中黑晩為井伊直孝所聘。食秩二千石。或傳逵與中黑可兒及

丹波山城谷出羽稻葉内匠渡邊勘兵衛。約為兄弟相尚以勇號七兄弟云。

關ヶ原の戰ひよ祐筆梶左馬助かねて御書を九月十五日の日付にて今日巳の刻御勝利と認置きり東照宮御感有て十五日とさしたるハ尤なり巳の刻といへるよ左馬介承りて敵ハ大軍なり巳の刻を過たらハ御敗軍と存たりきと申せり左馬介ハ上田善四郎か四男にて禄四百石後千石賜ハりて御使番なり

關原之役東照公書佐梶左馬助豫作捷報曰九月十

紹成書院藏

五日巳牌大軍實先鳴矣。公後見之。感嘆因問卿以十
五日為期。固善矣不知何以知巳牌敗賊。對曰賊兵甚
衆若過巳牌我軍或不免左次。臣是以知之。左馬介上
田善四郎第四子。秩四百石後為行人。食千石云。
利長の兵山田勘六郎は。十四歳にて父の仇を討
たる人なり。ある日利長弩藏の戸を開くとて。山
田に鑰をあつけられしか。急ぎ来れと呼れしに。
おそくまゐれば。忿て持たる杖にて突れしに。
思はざるに額に中りて血流る。跪て平伏せしに。
脇差の鞘走りたるが。手むかひもするやとて。た
ゝみかけて。杖にて打んとせられしを。おさへよ
て。山田を引のけたり。山田此より病と稱して。引
こもり居たりしに。關ヶ原の亂起りて。利長大聖
寺の城を攻る時。一段高き所に打上り。武者おし
を見物せらる。山田五六十人計引具したるを最
期と出たちて。おし通り。城に近くと先がけして
一番に乗込。鎗にて乳の下を突とおされ。痛手な
れば堞の下におちつるが。かねて從者にいひふくめ
しかば。息絶ざる内に。利長の前に帰来る。利長見
て後悔せられし事甚しく。其あやまちを。懇にこ

紹成書院藏

とりて涙を流さる。山田やがて死たり。行年廿歳。世にをしまるゝ美男なりしが。大剛のちからきゝして討死しける。其前日ちぎりし朋友に奇南香をとりち贈りしを。其頃大聖寺きやらといひてもてはやしたりといへり。

前田利長臣。山田勘六郎年十四。擊父仇殺之。已而為利長近侍。利長嘗屬内庫鎖匙。已而欲發庫。急召之。踉蹡入見。利長怒其不亟至。以杖撞之。中額見血。山田惶恐。遽跪伏席。適副刀微挺。利長以其欲拒敵也。益怒。將復擊之。左右掖之退。遂稱病家居。會東西搆兵。利長為東軍攻大聖寺。登高阜以觀師。山田將五六十人從前過。遂先登。為城兵槍貫乳下。墮於崖。豫命從者。及未絕舁至利長前。利長深自悔恨。流涕謝過。以頃遂死。方弱冠矣。山田美風姿。當時罕比。先戰一日。分所藏奇南香贈所親。皆相傳寶重。號曰大聖寺奇南云。

關ヶ原の軍に功有たる諸將の家臣を召て。東照宮御盃を下されし時。福島正則の士大將福島丹波は跛。尾關石見は瞎なり。長尾隼人は聾なりしうぞ。近習の人々能きことその集り候とさゝやきけるを聞し召。汝等年若くとも能聞け。女は容

儀を尊ぶ事よ。よし形はいかにもせよかし。かゝる軍に功名したるを男とはいふぞかし。彼三人は世に勝れたる大剛の者なり。汝等が志十に二三を彼者に似せたらんは、よかるべきなんとぞ仰せられける。

關原之役。東照公已敗西軍。召見諸侯臣有功者。賜酒褒寵之。福島正則臣。福島丹波。尾關石見。長尾隼人。更進受觴。丹波跛。石見眇。而隼人則聾。公左右相與附耳語曰。何不全人同萃于一堂也。丹波等已退。公曰。唯女子貴色而已。若夫士復何有於形貌。苟能從軍建殊功。斯謂之士矣。夫三子者。皆驍勇絕倫。汝等或有似彼十之二三者。吾亦尚之。汝等雖少。聽我言自戒可也。

初學文範卷之一　終

48-13827

三冊 (20) 乙 八十円

初學文範 卷之一

紹成書院藏

48